

戦争ドラマ

飯島勅・小川政弘作 「青春特攻隊」

(効果音) (ガソリンスタンド。車が入ってくる。)

山田貴夫 いらっしやいませ。

客 頼むよ。満タン。

貴夫 はい、満タンですね。(間)今日はいい天気ですね。どちらまでドライブですか？

客 箱根までね。

貴夫 …ありがとうございます。お気をつけて。

(効果音) (車、走り去る。)

ナレーション 彼、山田貴夫、16 歳。東京都葛飾区青春中学を、この春に卒業。今は、こうしてガソリンスタンドで、明るく一生懸命に働いています。そんな彼の姿に、つい数か月前までの彼を知っている昔の仲間たちは、目を疑うでしょう。彼は、青春中で、ツッパリグループのリーダー、そう、彼らの言葉で言えば“アタマ”をやっていたのです。学校の成績はほとんどが2と1。バイクに目がなく、無免許運転とバイクの盗みで、それまでに 3 回補導されていましたが、それでもやめず、黒のヘルメットに黒のブーツで、単車をブツ飛ばす時だけが、彼の人生のすべてでした。そんな彼が、どうして堅気の生活を送ることができるようになったのでしょうか。それは、卒業を来春に控えた、去年の 12 月のことでした。――

(音楽) (ブリッジ)

(効果音) (雑踏)

貴夫 先輩、話ってなんですか？

右翼の先輩 こんなところに呼び出して悪かったなあ。まあいい。ちょっとそこに座れよ。

ナレーション 先輩というのは、オートバイ仲間知り合った暴走族のリーダー。貴夫より 2 歳年上で、高校は中退して右翼の「自由青年特攻隊」に入隊。昼間は特高服を着込み、街頭でアジ演説を行う車の上に立ち、ハデな軍艦マーチを、ボリュームいっぱい都内を走り回っていました。

先輩 山田、オレはな、前々からお前に目をつけていた。中学卒業したら、オレのところへ来ないか？ お前ならできる。これはやりがいのある仕事だ。墮落した日本を救う、男一生の仕事だぞ。

貴夫 日本を、救う？

先輩 そうだ。日本は間もなく戦争になる。

貴夫 セ、センソウ？

先輩 相手はソ連だ。ソ連はすぐそこまで来ている。北海道にソ連が侵入してくるのも、今や時間の問題だ。

貴夫 えー?!

先輩 日本の自衛隊なんてのは頼りにならない。オレたちがやらなくちゃダメなんだ。日本が、全く自由のない、恐ろしいアカ色に染まってもいいのか?!

貴夫 でも、高校ぐらいいは、いくら成績が悪くても、出たいしなあ。

先輩 お前、学校に行って何かいいことあったか？ 毎日、受験、受験の明け暮れ。頭のいいやつには楽しいとこかもしれないけどよ。まあ、それでお前も少しは抵抗してツッパってんだろうが、とにかく、オレたちの若い肉体が、今、祖国日本の再建のために必要とされているんだ！

貴夫 はあ。それじゃ先輩、差し当たり中3の今のオレに何ができるんでしょうか？

先輩 うム。そうだなあ。とりあえず卒業までの数か月、もっと学校の中で暴れろ！

貴夫 えー?!

先輩 特に日教組のアカ色先公の授業でやれ。日教組はオレたちの敵だ。少しでもやつらに打撃を与えるのだ。いいか、日本から自由をなくさないためにな。山田、オレのこの特攻服を見ろ。これは単なるカッコよさで着てるんじゃない。特攻服は、お国のためにすべてを投げ出す男のシンボルだ。その特攻服のお前が必要なのだ。中学でたら、山田、お前も自由青年特攻隊に入れ！

ナレーション 事件は、年が明けた1月の下旬に起きました。“受験組”といわゆる“落ちこぼれ組”が分けられ、しかも教師のほとんどが受験生の対策に追われて、落ちこぼれ組を全く無視し出したのに腹を立てて、クラスが騒ぎ出したのです。

(効果音) (職員室のドアが開く音。)

貴夫 おい、3年生の先公、集まれよ。ちょっと話したいことがあつからよ。

加山先生 ああ、君たちか。どうした？ 話ならわたしが聞こう。

貴夫 お前じゃダメだ。おい、村田、君原、鈴木、総勢約9名。出てこいよ。てめえらに言いてえことが山とあんだよ！

加山先生 分かった分かった。山田、それならわたしと差しで話さないか？

貴夫 あんただけじゃダメだっつってんだろ。みんな気が立ってんだ。引っ込んでくれよ！

貴夫ナレーション その先生とだけは争いたくなかった。加山先生。年は60くらいだろうか。左足が不自由で、ステッキをつけていた。社会科の担任で、口を開けば日本国憲法のすばらしさを説き、日本の軍備力の増大を怒り、核戦争の脅威を教壇から訴えていた。仲間の硬派の連中や先生たちからも、“アカ”呼ばわりされていたが、おれには、あのヤセた体を震わせて、「平和を守れ」と叫ぶように話す時の、先生の目の光が、いつも何か胸の底にジンと来ていたのだ。

ナレーション その時でした。一人の生徒が、頭ごなしに押さえつけようとしたほかの先生に

怒りを爆発させ、組み付いていきました。20 人の生徒全員は総立ちとなり、せきを切ったように、先生たちに突進していったのです。

貴夫 いてえ、この野郎！

貴夫ナレーション おれは、力任せに先生たちに殴りかかっていった。無我夢中だった。もう一人のおれが、「やれ、やっちまえ。先公は敵だ！」と狂ったように叫んでいた。俺の中で、いつしかあの特攻服のカッコいい先輩の姿が、おれと一つになっていた——。気がついたら、加山先生は左足を押さえ、おれの足元にうずくまっていたのだ。

(音楽) (暗く悲しい感じ)

ナレーション 事件の処理は 3 日後になされましたが、とりあえず翌日の授業は平常に行われました。2時間目は社会科でした。

(効果音) (教室のドアが開く音)

生徒 起立。礼。着席。

貴夫ナレーション 足を引きずるように教室に入ってきた加山先生の顔は、赤黒く腫れ上がっていた。おれは思わず顔を背けた。だけど、驚いたことに先生は、いつもと同じように穏やかに話し始めた。

加山先生 今日はひとつ、わたしの戦争体験を話そう。あれはちょうど今から40年前、日本の敗戦の色が濃くなって、その劣勢を盛り返そうと、南の空に神風特攻隊が出撃し始めたころだった。若いわたしはそのころ、フィリピン、ルソン島で、アメリカ軍との戦いの最前線に駆り出されていた。

(効果音) (戦闘音)

加山先生 どれだけ時間がたっただろうか。戦火が遠くの中、わたしは左足を撃ち抜かれて、一人取り残され、ジャングルに倒れていた。全くの静寂が恐ろしいほどだった。遠く日本を離れたこの島で、このまま独り死ぬのかと思った。歯を食い縛って立ち上がろうと頭をもたげたわたしの目に、南の太陽を浴びて真っ赤に燃えるハイビスカスの花が映った。わたしはそのあまりの美しさに、言い知れぬ感動に打ちのめされて思わず立ちすくんだ。人間同士の、醜い血を血で洗うような戦いなど知らぬように、無心に咲き誇るその花は、平和の象徴のような気がしたのだ。その時、波打ち際に目をやったわたしは、墜落した一機のゼロ戦の残がいを見た。翼を半ば砂に突っ込んだまま、燃えて黒焦げになった戦闘機の残がいは、まるでそこにあるのが場違いであるように、わたしの目に映った。近寄ったわたしは、操縦席の下のほうから、奇跡的に焼け残った一枚の赤茶けた写真を見つけた。そこには、両親に囲まれて飛行服に身を包んだ、そのゼロ戦のパイロットが写っていた。わたしは、その顔のあどけないほどの若さにハッとした。この命が、あたらこの南の島で散ったのだ。なんのためだ?! わたしは、怒りとも悲しみともつかぬものがドッと込み上げて、スーッと血の氣

が引くような気がした。その時、わたしの心に人の声みたいなものが響いた。「幸いなるかな、平和ならしむる者。その人は神の子となれられん。」——それは、わたしが中学生の時に読んだ聖書の言葉だった。わたしは、何かに憑かれたように、歩き出した。「死ねない。おれはまだ死ねない。」うわごとのようにそうつぶやきながら、わたしは心の中で、“もし生きて帰れたら、一人でも多くの人に平和を語るために、この命をささげよう”と誓っていたのだ。

(音楽)

(平和に満ちたBGM、最後まで)

貴夫ナレーション

聞きながら、気がついたらおれは泣いていた。なんだか知らないけど、涙が出て止まらなかった。その涙と一緒に、おれの中から何かが出ていった。そして、淡々と話す先生の横顔を見ながら、おれも、それまでのおれの生き方と、全く別の生き方がなんだかできそうな、そんな予感がしていたのだ——。

<完>